

きのこの体は、一般的に微細な糸状の菌糸からできています。菌糸は、種子植物でいえば根・茎・葉に相当し、いわば“きのこ”にとって本体にあたる重要な部分です。

この菌糸は、葉緑素がないために自分で養分を作り出すことができず、もっぱら他の生物に寄生した生活か、枯死体から栄養分を得る腐生生活をしています。

菌類は、胞子をつくる場合に子実体(しじつたい)をつくります。この子実体が、目立って発達しているものを、一般に「きのこ類」といい、そうでなく微細で顕微鏡的な大きさのものを「かび類」と呼んでいます。きのこのかびは、分類学的にまとまったグループをさすのではなく、習慣上の区別にすぎません。

日本には、およそ5,000種のきのこが知られています。そのうち、神奈川県では500種ほどが確認されています。フルイタケやニオウシメジのように、亜熱帯性のきのこも見られますが、気候に関連して暖温帯性のきのこが大部分をしめています。箱根や丹沢の標高の高いところでは、ブナやミズナラの倒木上に、ツキヨタケ、ムキタケ、ブナハリタケ、ヌメリツバタケなどの冷温帯性のきのこもみられます。

今から20年前に発足した「神奈川キノコの会」の調査によって、神奈川県にどんなきのこがあるのかは、次第に明らかにされつつあります。収集した標本類は当館や平塚市博物館、横須賀市自然博物館の収蔵庫にそれぞれ保管されています。

しかし、小田原市とその周辺地域のきのこの本格的な調査はまだ行われていません。まず館の周辺を対象としてどんなきのこが見られるのか調べてみました。

入生田駅北側の照葉樹林

箱根外輪山の下端に位置する塔ノ峰(標高566.3m)の東側にのびる尾根の先端部分にあたります。この地域は、小田原市の中

心に比べ箱根山塊の影響を受け、市街地よりも降水量が多い傾向にあります。

この付近は、スギやヒノキの植林地として、またミカン畑として利用されている斜面も目立ちますが、長興山鉄牛和尚の寿塔付近の樹叢は、「かながわの美林50選」に選ばれ、また長寿園から妙力寺にかけての周辺にはスダジイの立派な林が残されています。9月中旬から10月下旬にかけて、長寿園近くのスダジイを主体とした樹林内の地面には、ドクツルタケが各所で見られます。このドクツルタケは、高さ15cmぐらいの大きさのもの1本で、元大関の小錦をあの世へ送るほどの毒性をもちます。ドクツルタケの特徴は、柄につばとつぼをもち、一説には“毒性をもつ純白の鶴のような茸”という意味あいでも名づけられたといわれます。このきのこは、手でふれたぐらいでは心配はありませんが、食べることは厳禁です。平成8年の秋には、この林内で80本以上発生しました。その他に、ローマの皇帝が好んで食べたきのこといわれるタマゴタケも発生しています。両者はテングタケ科に属するきのこで、形態が複雑に分化し、きのこのなかでは進化したグループに属します。

また、スギ植林地の朽木上には、スギ林特有のスギヒラタケや落枝上にはスギエダタケが発生します。

博物館から南に位置する一夜城

早川沿いに下り、太閤橋を横切ると一夜城公園へ通じる道に出ます。ミカン畑、さらにその上は、樹齢40年生ぐらいのスギの植林地になります。このスギ林は箱根ターンパイクの上を横切り一夜城公園付近まで続いています。一夜城公園付近はマツが植栽され、スダジイ、コナラ、タブノキなども見られます。

スギ植林地内で見られるきのこは、北側の照葉樹林やスギ林で見られるものと同じものですが、道路沿いの草地ではハタケシメジやホコリタケの群生が目立ちます。ハタケシメジは道路沿いや畦などの人の影響を受ける場所に多量に発生する食用きのこです。

ホコリタケはキツネノチャブクロとも呼び、高さが3~4cmのやや細長い白い球状のきのこです。やがて、袋内の胞子が熟すと先端部に穴があき、褐色に色づいた胞子がほこりの様に外部に飛び出ます。中味が白いうちは、薄く切ってお吸物の具にします。

公園周辺の松を主とする林や芝生上には、コガネタケ、ササクレヒトヨタケ、ケコガサタケなど開けた草地に発生するきのこが見られます。そのなかでも、コガネタケは形態的に興味深い種類で、からだ全体が黄色一色で、傘の表面や柄はあたかも黄粉をかぶせた様な微細な粉に覆われます。食べられるきのこですが、この黄色い粉を煮こぼさないと、人により軽い中毒を起こすことがあるので注意が必要です。



図1. ドクツルタケ(テングタケ科)。柄につばとつぼをもつ純白なきのこ(猛毒)。入生田では、人家の周辺にも見られる。



図2. ハタケシメジ(キシメジ科)。道路沿いの土上に発生する食用きのこでひだの色は白色。毒きのこのクサウラベニタケは、ひだが桃色か肉色をしているので区別がつく。